

Overview: 世界の不透明感を反映する金価格の高騰

国際的な金価格は、近年では高騰が目立っている。ニューヨーク市場の先物（直近限月）における1トロイオンス（約31グラム）当たりの価格は、2025年に入ってから3,000ドルと4,000ドルの大台を相次いで突破しており、足元では一時4,300ドルを超えるなど史上最高値を更新し続けている。

このような金価格高騰の背景としては、世界的にデフレやディスインフレの時代が終わり、インフレ対応資産としての評価が高まっていることがまず挙げられる。金価格の推移を過去50年あまりで見ると、米国の代表的な株価指数であるS&P500指数の上昇率とあまりそん色がない。一方で、世界各地での地政学リスクの台頭や、米国のトランプ関税等による世界経済の先行き不透明感の強まりは、安全資産としての金の評価が高まる要因になっているとみられる。ほかにも、これまで米ドルで保有してきた外貨準備の一部を金に置き換える国が増えてきており、その結果、金の現物需給がタイトになっているという側面がある。

様々な要因の中でも足元で注目すべきは、金価格高騰は世界的な財政拡張傾向が一因となっている可能性があることだ。近年の金価格での一本調子な上昇は、長期的な安全資産としての競合相手である国債への信用低下を反映している可能性が指摘される。金は国債とは異なり利子を生まない資産であるにもかかわらず、その価格が高騰し続けていることは、他方で日本国債も含めて超長期の債券利回りが上昇傾向（債券価格は低下）にあることと共に、留意すべき事態といえるだろう。特に金価格の高騰が目立つここ数年で、国債への信用低下が同時に進んでいるとするならば、米国での大規模減税法の成立や欧州での財政拡張路線への転換をはじめ、世界的に広がる財政拡張路線への不安感がその大きな要因である可能性は高い。

先に価格上昇が加速した金価格のみならず、直近では銀や白金（プラチナ）等の他の貴金属の価格や、一部の不動産価格の高騰も話題となっている。一方で、近年金価格と共に上昇が目立っていた仮想通貨等の暗号資産価格は、直近では停滞している。資産の実物回帰の動きともいえることから、資金シフトによるマーケットの不安定化にも注意を要しよう。（佐藤 光）

主要国実質 GDP 見通し＜要約表＞（2025年10月21日時点）

（％）						（前年比％）							
	2024年	2025年				2026年			2023年	2024年	2025年	2026年	
	10-12	1-3	4-6	7-9	10-12	1-3	4-6	7-9	（下線及び斜字は年度）				
日本	2.1	0.3	2.2	-1.7	0.5	1.0	1.0	1.0	1.2	0.1	1.1	0.6	
									<u>0.5</u>	<u>0.7</u>	<u>0.8</u>	<u>0.8</u>	
米国	1.9	-0.6	3.8	2.8	0.8	1.8	2.0	2.0	2.9	2.8	1.9	1.9	
ユーロ圏	1.6	2.3	0.5	0.2	0.9	1.2	1.4	1.6	0.4	0.9	1.3	1.1	
英国	1.0	2.7	1.1	0.7	0.8	1.1	1.3	1.4	0.4	1.1	1.4	1.1	
中国	5.4	5.4	5.2	4.8	4.4	4.3	4.2	4.2	5.2	5.0	4.9	4.2	
ブラジル	3.6	2.9	2.2	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	3.2	3.4	2.2	2.0	
インド	6.4	7.4	7.8	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	<u>9.2</u>	<u>6.5</u>	<u>6.5</u>	<u>6.6</u>	
ロシア	4.5	1.4	1.1	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	4.1	4.3	1.5	1.0	

（注）グレー部分は予想値、それ以外は実績値。四半期伸び率は、中国、ブラジル、インド、ロシアは前年比、それ以外は前期比年率。

（出所）各種統計より大和総研作成